SHORT ESSAY

牛丼屋になった漱石生家

池内恵吾

Keigo Ikeuchi

いけうち・けいご　松前町出身。元愛媛放送（株）取締役。俳句雑誌「春耕」に、「近世伊予俳人列伝」「明治伊予俳人列伝」などを執筆した。引き続き同誌に連載している「伊予俳句風土記」が六年目に入る。俳人協会会員、放送批評懇談会会員。

十数年ぶりに東京で暮らすようになり、わが家のある早稲田界隈の変貌ぶりに驚いている。静かな住宅街であった陋屋の一帯は、オフィスビルやマンションにとり囲まれてしまった。高田馬場駅から早大への通りは神田とならぶ古書街だが、いまでは古書店を圧倒する勢いでラーメン屋が軒を連ねている。

早稲田は夏目漱石ゆかりの地だ。わが家から徒歩数分の早稲田南町にある漱石公園は、終焉の家・漱石山房の跡。漱石の胸像と猫塚が建っている。ここから直線距離で四百メートルほどの喜久井町で漱石は生まれた。早稲田通りを馬場下から夏目坂へ曲がる左角が酒屋。その隣が漱石生家跡で、安倍能成の筆による「夏目漱石生誕之地」の碑がある。

漱石は亡くなる前年のエッセイ『硝子戸の中』に、喜久井町の家での幼年期の思い出を記している。隣の酒屋の娘のお浚いを聞きながら、長唄「勧進帳」の文句を覚えてしまったこと。筋向かいの豆腐屋と寄席の間を入った奥の誓閑寺の勤行の鉦の音が「何時でも私の心に悲しくて冷たい或物を叩き込むように小さい私の気分を寒くした」ことなどだ。高田馬場の仇討ちのとき堀部安兵衛が立ち寄って桝酒を飲んだという角の酒屋は、いまも健在。豆腐屋の場所はコンビニになったが、誓閑寺は当時の場所にある。

『硝子戸の中』には、山房に移ったころ、喜久井町の家は下宿屋になっていたとある。私が知っている昭和五十年代まで、漱石生家跡は家具屋であった。その後、バブルのころ豪華マンションに建て替わり、一階の貸店舗には不動産屋の事務所や居酒屋があった。先日久しぶりに夏目坂を通ってみると、一階部分が改装されて牛丼屋が開店し、漱石生誕之地の碑を横目に客が出入りしていた。その牛丼屋チェーンは間もなく東証一部上場を果たし、紙上を賑わしたのである。

こんな早稲田の町の二十世紀最後の年の姿を、もし漱石が〝硝子戸の中〟から眺めたならどんな感想を漏らすか、聞いてみたいと思う。